

## ジョセフ・ヒコの異文化体験と帰国 (第3報)

山井 徳行

### Sur les Expériences de la Culture Etrangère de Joseph HEKO et Son Retour au Japon III

Noriyuki YAMAI

#### おことわり

この論文は、幼名を彦太郎といい、アメリカに帰化してジョセフ・ヒコとなった幕末の1人の漂流人の英語の自伝<sup>1</sup>に基づいて彼の異文化体験を検証して、日本人一般の異文化体験への示唆を得ようとするのである。特に、第二言語修得の観点からその問題を考えている。

第1報の第1章ではヒコの生い立ちと漂流の事情を、第2章ではアメリカ人との接触と戸惑いを、第3章では日本語と英語の違いに戸惑いながら15歳の彦太郎がアメリカで生活する覚悟を決める瞬間までを年代順に記述した。

第2報の第4章ではアメリカでの生活の始まりを、第5章ではボルティモアでの生活を、第6章ではヒコの実社会体験を、第7章で帰国の準備とアメリカの市民権獲得を述べてきた。以下はその続きである。

#### 第8章 帰国

さて話をヒコの帰国の旅に戻そう。1858年7月6日、独立記念日の二日後に、ヒコはニューヨーク経由でサンフランシスコに向かった。その旅行に関する挿話を詳細に取り上げる紙面の余裕はないが、それらの話から想定されることは、彼がアメリカの上流階級の中で人脈を広げ厚遇を受けていた、ということだ。一例を挙げれば、ニューヨークからサンフランシスコまでの船旅の間、経済的困窮にも拘わらず、友人たちの尽力で一等の客の待遇を受けた。上流階級の青年として遇されたのだ。

サンフランシスコで船が準備されるのを一ヶ月ほど待った後、9月26日にヒコはブルックとクーパー号で船出する。まずはサンフランシスコからハワイの間の太平洋の海を測定しながらの旅で、時間も掛かったがヒコの好奇心を刺激する興味深い旅であったようだ。

11月9日にハワイに到着して少し休息をとった。そこで何度か、捕鯨船に助けられた日本人漂流者の帰国に尽力する。ヒコはブルックの仕事を手伝いながら帰国する予定だったので、すぐに帰国のための船に乗ることが出来なかった。そうこうするうちに、新聞によって日米修好通商条約が結ばれたのを知った。同時に、比較的小さいクーパー号による海底測量事業の航海中に、ヒコの肉体が悲鳴を上げ始めていた。ひどい船酔いで体調を壊すことがたびたびあり、

ヒコはブルックに下船を願い出る。

許可されて捕鯨船に乗って帰国しようと計画していると、香港行きの快速帆船、シーサーペント (Sea Serpent) が入港してくる。その船に乗っていた友人、バン・リード (E.M. Van Reed) と偶然に再会する。それでは一緒に香港まで行き、そこから日本に向かおうと話進展していった。資金が余りなかったヒコだが、友人たちの計らいでまた一等船室の客として乗り込むことになった。彼の幸運なのか、上流社会の人間たちの相互扶助なのかははっきりしないが、ヒコはその切符を贈られたのだった。1859年4月に、香港に到着した。

そこでもヒコは彼の人脈を活用して日本への帰国の手筈を整えた。帰国の船での待遇は上級仕官のそれと同様であることが誇らしげに述べられている。さらにアメリカ大使として日本に赴任する予定のハリス (Mr. Harris) に会い、アメリカへの帰化証明書のコピーを渡している。その機会に神奈川のアメリカ領事に任命されていたドール氏 (Mr. E. M. Dorr) に通訳のポストを提示され恩義あるアメリカのために一肌脱ぎたいと考えていたヒコは喜んで承知する。

この帰国の準備期間には日本に帰国する喜びが随所に書かれているが、不思議に思えるほどアメリカ人として帰国することに対する心理的葛藤や不安はまったく窺えない。

13歳で遭難し、曲がりなりにも2年間の正式な教育を受ける機会にも恵まれアメリカ人の青年として成長したヒコは21歳で帰国しようとしていた。

翌年1859年6月18日、長崎港にヒコたちを乗せたミシシッピー号が入港した。9年ぶりに見る日本であり、周囲で話されている日本語に包まれてヒコは感慨にふけた。しかし、艦長の要請で周囲の日本人に日本語で話しかけることを自らに禁じた。彼の身元のことでも入国審査に時間が掛かって、ハリス大使やドール領事の赴任先への到着が遅延することを恐れたためだった。

それにも拘わらず、アメリカ人の船員と日本人の船員の間で悶着が起り、ヒコが通訳として事態を収める必要が生じた。日本の役人の驚きと猜疑心にもかかわらずアメリカ人として通じた。それには上述の理由があるとはいえ、自らのアイデンティティに関してのヒコの態度から、アメリカ人であることに誇りを持っている心性が窺える。

Before I began to translate, I asked the marine for the facts of the case. He stated them as above, adding that it was contrary to the Treaty for any native to sell liquor to our crew, or to American sailors on board ship. ... When we got seated, I began to explain what the marine had said, in Japanese. The official started bolt upright with surprise when I began to utter myself in his own tongue in the same idiom and with the same accent as himself. He dropped all mention of the man's case at once and began to ply me with question upon question as to who I was, where I came from, and how and where I had learned his language. ...

...

"And what did you tell him?" said the deck-officer.

"Oh! I told him I am an American, but he won't believe it," I answered.

At this point, the champagne was opened and we toasted each other. ...

... At this point the Lieutenant desired me to express his regret at what had happened, saying that he would instruct his men to be more careful in future. This gave the official perfect satisfaction and thus the case was amicably settled.

But the native officer's mind appeared to be far more exercised about my speaking

Japanese than the kicking of that junk-man. He asked again and again how I came to know his language and who I was but I gave him no opportunity of finding out. I had been requested by Captain Nicolson to keep my own counsel till we came to Kanagawa and I did so. This officer belonged to the Daimio of Hizen and his name was Massuda. I met him again in Nagasaki in 1867. (The Narrative of a Japanese Vol.1.pp.196-198)

この挿話は日本の役人がアメリカ人然としたヒコの日本語に驚くというありそうな話であるが、自伝の中で得意そうに語るヒコにはやむない事情でアメリカ人にならなければならなかったという忸怩たる想いはまったく感じられない。アメリカの恩人、サンダース氏は当時の日本の政治状況からヒコがアメリカ人として帰国したほうがヒコの安全が図れると考えて、アメリカに帰化することを勧めた、すなわち帰国のための政治的な駆け引きとして一時的にアメリカ人になることを示唆したのだが、ヒコは文化的にも心理的にもアメリカ人として帰国したのだろうか。このアイデンティティの問題は論文の最後に詳しく検討を加えることにする。

ヒコの国籍に関して日本政府はどのような対応をしたのだろうか。ヒコの自伝『Narrative』の第一巻が執筆されたのが1892年頃と推測される<sup>ii</sup>。ヒコは当時55歳で日本人の妻、浜田ちょう子を娶り比較的落ち着いた晩年を日本で過ごしていた。1897年に60歳で逝去している。自伝の中で、ハリス大使の要請にしたがって帰国からその時までアメリカ人として遇されたと少し自慢げに断言されている。

On July 1st the Governor, Sakai Oki no Kami came on board to pay his respects to the Minister and the Consul. On this occasion the U.S. Minister intimated to the Governor of Kanagawa that though I had been born in Japan, I was now a naturalized citizen of the United States. He requested that I should be treated as an American citizen and the Governor made a note of his request. And ever from that hour to the present I have been treated as such throughout on all occasions by the authorities. (id.p.201)

この文面から分かるように、帰国当時の逮捕・詮議の恐れは昔話になり、政界に蓄積してきた人脈によって名声も勝ち得たヒコはアメリカ人という保護膜をもちや必要としなかったが、明治25年の執筆時においても日本人に戻ろうとはしなかった。その気さえなかったように読める。

一方、アメリカに戻ることもなく、その生涯を日本で閉じることになる。アメリカの国籍はその政治的戦略の意味を失っていたにも拘わらず、アメリカ人で居続けたのは何故なのだろうか。また、アイデンティティの問題に突き当たる。

さて話を元に戻そう。幕末に帰国したヒコはおそらく当時第一の英語使いとして、またアメリカ通として維新の動乱にかかわり伊藤博文などの志士とも知り合って歴史に足跡を残すことになる。また当然のことだが、自分の家族との再会や故郷への想いが語られる。

## 第9章 再会

望郷の念は当然、自分の家族や故郷への強い愛着を前提とする。ヒコの産みの親はすでにないことは述べた通りだが、義父と実の兄がいて、神奈川の港に入港する前に立ち寄った下田の港で、ヒコは彼らの消息を尋ねている。肉親に早く会いたかったのだ。残念ながら、1854年の大地震と津波により町は破壊され人も変わったせいか、消息をつかめなかった。それでも、実

の兄との対面が実現するが、兄は始めはヒコが分からなかった。アメリカの教養のある青年に成長していたヒコの変貌が激しかったのだろう。ヒコもこの対面にはひどく感動して落涙し言葉も出なかったところはすでに引用した<sup>iii</sup>。ただ、これには後日談がある。

ヒコは兄を自分が仕えていたアメリカ領事に紹介し、夕食に招待し、アメリカの土産を持たせてやった。その中に、アンプロタイプというガラス製のネガがあった。そこにヒコと友人のヴァン・リードが写っていた。これが元でヒコの兄は当局に呼び出される。それも旅費や滞在費は自分持ちで大変な出費になったらしい。

…So he went up a second time, and the Governor returned the ambrotype to him, charging him strictly to shew it to no one outside the limits of his family. All this was related to me by my brother at a later visit. And he added that his taking home that likeness of my self and the foreigner (Van Reed) had cost him many rios. (id.p.213)

この文を読むと、ヒコと実の兄とのその後の関係が推測できるような気がする。2人の間には親密さが戻ってきたという感じはしない。実際に自伝では兄ことはこれ以降、言及されることがない。

兄との再会はヒコが帰国した1859年7月21日のことであった。そして、ヒコが夢にまで見たであろう故郷を訪れるのは、なんとそれから9年も経った1868年の8月7日であった。ヒコのアメリカ人としての立場や幕末の混乱や当時の交通事情を考慮すればこの月日の流れは理解できもする。実際に、故郷への訪問は幕末にヒコが知己を得た伊藤博文の取り計らいによって実現している。

その時の様子を自伝で次のように書いている。ヒコの文化的アイデンティティに関連するもので少し長い引用をしよう。

When we got within a few miles of my town, my relatives and their neighbours came out to welcome me. But they could not distinguish which was I, and seemed to be sadly afraid, for they stood apart whispering to each other, and bowed to us all as we passed on. We reached our destination at 4 p.m. on a hot and cloudless day.

Alas! Alas! How things seemed to have changed. When I left the village in 1850, to my boyish eyes the houses had seemed large and splendid, and the street a magnificent one, and all through the years that had passed since then, that impression of the place had been an ever-abiding one with me. But now what a disillusioning!! The houses mean, and low, and almost squalid in appearance, the magnificent street of my boyish days a mere common road way. For apart altogether from my exaggerated ideas of the size and appearance of the place when I left it, it had really decayed since 1850. Then it counted 62 houses; now it numbered no more than 30, and many of these looked only too like going the way of the two-and-thirty that had vanished.

All this was chilling in very sooth, but there was worse behind. Of the old faces many were no more, while the rest had gone away; all the young people were utter strangers to me while the thronging crowd of sightseers from the neighbouring village was exceedingly irksome and trying at such a time. Accordingly I found but small joy in my visit to my native town, and I made my stay there a brief one. At daylight next morning I again set my face eastward and returned to Kobe. (The Narrative of a Japanese Vol.2,pp132-133)

異国で夢見た美しき故郷は、まったく平凡で惨めな日本の村にしか過ぎなかった。文明が発

展しつつあるアメリカを体験したヒコにとってそれは当然のことのように入る。それにしてもなんとという幻滅感であろう。

文学の分野での原風景の概念は風土が言葉とともに人間の原体験を形成し、自己形成の基盤となるというものである。そこに当然、家族を中心とした親しい人間たちとの交流が入り込んでこよう。

自伝のこの部分には、親戚という言葉はあるが実の兄も出てこなければ、幼友達も登場しない。隣の村からやってきた野次馬達にうんざりしているだけである。ヒコは実際的で文学的な感傷とは無縁の人間らしいが、それにしても彼の意識は故郷を投げ捨てている。

実際に、次にヒコが生まれ故郷を訪ねるのは社会的な儀礼のためでしかない。2年後の1870年末に故郷を再訪している。それは墓の建立のためであった。

*October 25<sup>th</sup>. Left for Hiogo this day. On arriving there I went to see the Governor, and applied for a passport to enable me to visit my native village, where I purposed to have a tombstone erected to the memory of my parents and of my brother. I received the passport and went down to the place, where I ordered a granite stone to be erected. (id.p.148)*

この記述によるとヒコの兄も逝去している。ヒコの故郷との人的関係はいっそう薄くなったようだ。

それからさらに1年後、1871年の11月2日に自分の帰還と墓建立のために2つの宴会を生まれた村で催している。これが自伝の中で故郷について触れられている最後の記述である。ただ事務的に述べられているので引用はしない。

近藤晴嘉氏の研究などによると、「アメリカ彦蔵」と地元で呼ばれるヒコの評判はあまり芳しくない。ヒコの故郷への思いは最初の幻滅とともに費えたのであろう。

アメリカで恋焦がれた日本、その故郷はヒコの心ですでに崩壊していた。単に故郷だけではない。日本文化全体に対するヒコの評価も決して高くもない。幕末から明治にかけて時代の寵児たちと知り合い豪勢な食事の供用を受けたに違いないヒコの日本食に対する感嘆もほとんど見られない。

ジョセフ・ヒコは、家族からも故郷からも離れ、日本が提供する衣食住の文化にそれほどの関心を示さない人間になっていた。あるいはアメリカ体験をした時代の異端児は自分の中にある日本人としての文化的アイデンティティを眠らせたままにしておいたのかもしれない。アメリカ式教養人としてカトリック教徒としての意識は彼の日本人性を凌駕してしまったのだろう。

しかしながら、ヒコがこの時代に脚光を浴びたのは日本人性の柱である日本語の能力によってであった。通訳としてアメリカ文化の伝道士として歴史の中で活躍するのだ。

## 第10章 動乱の中で

ヒコはアメリカ領事ドール氏の通訳として、領事館の設置に係わるあらゆる仕事に携わる。それは領事館の日本人の召使や警備員の選定から日本の役人との外交折衝にいたるまでで、日本語と英語の二言語を操るヒコがいかに重宝な人間であったかが実感される。ヒコの活躍は、アメリカ領事館の仕事に限定されていなかったようだ。

ヒコは、1859年にロシア人が浪人に襲われて死傷したとき、ロシア側の通訳として日本の役人と交渉し、事件の解決に一役買った。ヒコに感謝したロシアのポポフ提督（Admiral

Popoff) は愛用の金時計を送っている<sup>iv</sup>。この事件で、新見豊前守正興が新たに神奈川奉行に任命された。ヒコは仕事上、彼と付き合いがあったと思われる。1860年、遣米派遣使節団の正使として彼が咸臨丸でアメリカに出発したときも、何かと世話を焼いている。その時に勝海舟はじめ、日本の代表者に紹介された。

このように、アメリカ領事館の通訳として働きながら、日本人の重要な人物と知り合いになっていった。だが、咸臨丸がアメリカに向かって出発してまもなく、ヒコは領事館の通訳の職を辞している。1860年の2月末のことである。その後、貿易の商売を始めているところから見て、商売に対する関心がそうさせたと考えるのが自然であるが、後述するがドール領事と必ずしもうまく行っていなかったのかもしれない。

ヒコ一行が日本に着任したのは、大老井伊直弼のもとで安政の大獄と呼ばれる尊王攘夷派に対する弾圧が行われていたときであり、上述したロシア人の暗殺も攘夷派浪人の仕業と思われる。井伊直弼は、1860年3月24日に暗殺される。桜田門外の変である。このような国内情勢は、当然、外国人(夷人)や貿易商に対する尊攘派の攻撃となって表面化した。1862年の生麦事件はその典型である。当然のことに、横浜在住の外国人たちの周りに危険が迫っていた。日本人の癖にアメリカ人になり、アメリカ領事館の通訳として働いた後は、貿易などに従事して日本経済に混乱を引き起こしていたヒコも攘夷派の天誅のリストに載っていたようだ。

*September 16<sup>th</sup>*. For the past six or eight months I had been frequently warned by the native authorities of Kanagawa and Yokohama to be careful of myself. They cautioned me not to ride out on the Tokaido, or to any place at all distant from the Foreign Settlement, inasmuch as it was a well-ascertained fact that several ronin deemed me worthy of their attention, and were on outlook for me to cut me down. There (ママ) warnings had of late waxed far too frequent for my comfort. At the same time I had some idea of making a visit to America, partly in order to take some presents to my friends who had been so kind to me during my sojourn in that country; and partly to obtain the post of U.S. Naval store-keeper, inasmuch as this position would entitle me to gold bands on my cap and so place me on an equality with the native officials. So I got ready and started in the ship Carrington, and arrived in San Francisco in October 16<sup>th</sup>, after a passage of 29 days. (The Narrative of a Japanese Vol.1.p.278)

1861年の10月にアメリカの土を三度目に踏んだヒコであったが、アメリカではこの年に南北戦争が勃発していた。その余波で彼のアメリカ旅行も誤認逮捕されるなど波乱に満ちたものであったが、親切なアメリカ人や友人に助けられて無事にサンダース氏にも再会できた。だが、ヒコが手に入れようとしたthe post of U.S. Naval store-keeperは確保できなかった。そのかわり、アメリカの大統領と初めて握手した日本人ヒコはこの機会にもリンカーン大統領と会い、握手している。リンカーンの素朴だが威厳のある態度に大きな感銘を受けた<sup>v</sup>。この10ヶ月ほどのアメリカ滞在でも、ヒコは上流階級の教養ある日本生まれの青年として厚遇されている。アメリカが儀式ばらない気さくな国でも、誰でも大統領に面接できるわけでない。ヒコは豊かな人脈を持っていたと考えていいだろう。

1862年10月13日、ヒコは横浜に戻りまたアメリカ領事館の通訳として働き始めた。そのとき日本は生麦事件の興奮の中にいた。同年8月21日に起こったイギリス人の殺傷事件は、横浜の外国人たちを恐怖させ、イギリスに賠償金を要求する機会を与えた。朝廷の攘夷の要求に苦慮していた幕府は巨額な賠償金を支払わざるを得なかった。イギリスは薩摩藩に対して生麦事件

犯人の処刑と賠償金を要求したが、薩摩藩は拒否し、1863年7月の初めに薩英戦争が起こる。

その一ヶ月前には、幕府の自重の命令にもかかわらず長州藩が下関海峡を通過しようとしていた外国船を砲撃して攘夷を敢行した<sup>vi</sup>。前年の公武合体の結果、諸藩に対する幕府の権威が失われていたのである。この長州藩の攘夷に対してイギリス・フランス・オランダ・アメリカの艦隊が報復する。ヒコはアメリカの軍艦上からこの戦闘をつぶさに観察して詳細に記述している<sup>vii</sup>。

これらの戦闘をとおして長州と薩摩は欧米の底力を知り開国へと方針を転換していく。薩摩藩が1865年にイギリスに留学生を送ったのがその象徴である。後の伊藤博文などの長州藩士は密航してイギリスに渡った。

この時期は、尊攘派と開明派が入り乱れた混乱期であり、アメリカに滞在し西洋文明の直接の体験者であるヒコは明治維新の立役者となる開明派の人々の知遇を得てゆく。その話に入る前に、ヒコによってなされた、近代ジャーナリズムの嚆矢となる『海外新聞』の発刊に触れる必要がある。ヒコの研究家の間では、日本における初めての新聞の発刊者としてヒコを位置づけるのが一般的である<sup>viii</sup>。

自伝の二ヶ所で海外新聞に触れている。引用する。

In the course of this month I began the publication of the Kaigai Shinbun, a Japanese newspaper printed with wooden type and containing a summary of foreign news. This was the first newspaper ever printed and published in the Japanese language. It continued to be issued from this date until I left for Nagasaki—a period of about two years. (The Narrative of a Japanese Vol.2 p.53)

In the course of the year I had innumerable native visitors to my place,— all eager after foreign news, more especially the local authorities. So, as I already mentioned, I began the publication of the Kaigai Shinbun, a newspaper translated from Foreign papers whenever the mails arrived, and giving the local Prices Current for Imports and Exports, for the benefit of the natives. But it was a strange fact that although the native public were anxious to read the paper, they were afraid, I believe, on account of the Government and the law at that moment, to subscribe to it or to buy it; so I had to give it away mostly for their benefit: the only regular subscribers being one Samurai (Shomura) of Higo and another (Nakamura), an officer of Yanagawa, in Kiushiu. (同上p.59)

この二つの記述は、前者が1864年6月28日で後者が同年の8月20日である。日本最初の新聞は1864年6月に発刊された。また、この発刊の動機については、当時の欧米の文明への関心からひっきりなしにヒコをたずねて来る人たちがいたことを挙げている。その中に、伊藤博文や木戸孝允がいた。

ここで特記したいのは、新聞の必要性和将来性をよく知っていた筈のヒコが2年で海外新聞を廃刊してしまったことだ。その後で、お茶の貿易や精米の商売などに手を出して失敗している。新聞事業を続けていたら、彼の人脈や当時の情勢からして、日本の新聞王になっていた可能性が高い。ヒコはここで大きな過ちを犯したと考えてもおかしくはないだろう。

ここで生麦事件の興奮の中に戻ってヒコの置かれた状況を見てみよう。商人や異国の文明に興味を抱く者がヒコを頼って知識を得ようとしたのに対し、長州藩の過激な尊攘派は下関事件でアメリカの軍艦に乗っていたヒコに天誅を加えようとしていた<sup>ix</sup>。欧米諸国と貿易を行って

いた商人たちも志士たちによって斬殺された<sup>x</sup>。このような殺気立った国情の中で、1863年9月30日、ヒコはアメリカ領事館通訳の職を正式に辞して貿易の仕事に就く。もっとも自伝にはアメリカ領事のために通訳を務めている記載があるので、必要があればアメリカのために働いていたのだろう。自伝ではこの時期の生麦事件や下関事件に関する情報が多く記述されている。

1866年12月に仕事の都合によりヒコは横浜から長崎に移住する。アメリカ領事館から離れていたヒコに日本人も接触しやすくなったようで、備前藩の家来、本野周蔵が尋ねてくる。藩主がヒコに会いたいという。そのために迎えの汽船を来させるという<sup>xi</sup>。後日、備前藩主が京都の屋敷にてリューマチを患って困っているとき、アメリカの外科医、ボイヤー (Boyer) を紹介し共に公を京都に尋ねている。そのとき、いかに懇ろに供応されたかが詳細に記述されている<sup>xii</sup>。

その後も、幾多の藩主がヒコのアメリカ体験にもとづく外国事情を聞きたがった。他の漂流民とは違って曲がりなりにも2年ほどの正規の学校教育を受け、政治家で実業家のサンダース氏の寵愛を受けてアメリカの上流階級に多くの知己を持っていたヒコの文明論は、明治維新を前にした政治の混乱期に旧藩主や勤皇の志士達に多くの影響を与えた。説得力のある文明論を展開できる包括的知識をヒコが持っていたと考えてもいいだろう。

ヒコが自伝の中でことさら詳細に語っているのは、後の伊藤博文と木戸孝允 (桂小五郎) がヒコに西洋事情を聞きに来た逸話である。二人は幕府の目を逃れるために薩摩の侍に化けて長崎にやって来た。1867年の6月のことであった。

*June.* One morning this month two officers called at my house. They gave their names as Kido Junichiro and Ito shunske and said they were officials from Satsuma. I received them as such, and they at once fell to asking me questions about foreign matters—more especially about the history of England and America, their institutions, Governments and so forth. I answered their queries to the best of my ability. The elder (Kiko) expressed himself as very much interested in the Constitution of the United States—he said it was quite new to him.

…

A few days later the officers called again, and I asked them to tiffin and they accepted my invitation. At table I casually remarked that I could hardly ever have taken them for Satsuma gentlemen, inasmuch as their accent and idiom smacked more of the Inland Sea than of Satsuma. Then turning to Kido I asked him directly whether his name was not Katsura. Upon this the two looked at each other in astonishment for some seconds and then they smiled. After that Kido turned to me and said that I was quite right, and that what he was now going to tell me must be kept strictly private.

“You know,” he said, “that we are very wrongly and unjustly considered and treated as rebels by Shogun’s government, since we have done nothing to merit that name. On this account we borrow Satsuma’s name whenever we come to Nagasaki on business.”

After this disclosure they began to talk to me more freely about the real object of their visit to Nagasaki. … (同上pp.90-92)

木戸は自分たちの政治運動を正当化するためにヒコに皇国史観をとうとうと述べたらしい。そして日本にいる外国人に正しい歴史を教えてくれるように依頼する。さらに長崎における長州の代理人として働くことを求められたヒコは承知する。木戸と伊藤の署名付きの契約書まで

渡された。ただ、そこには報酬の約束などは決められていないし、すぐ後で二年間、何の報酬もなく長州のために働いたと少し恨みっぽく書いてある。木戸や伊藤からすれば、自分たちの大義にヒコを引っ張り込んだつもりだったのだろうか。この会談で兵庫が開港された折には長州の特別代理人に任命して便を図るとの約束もあったが、結局はその約束も果たされなかったとヒコは嘆いている。

その後の関係がどうなれ、ヒコは明治維新の元勳と知り合いになりその運動に加担した。この会談後間もなく、ヒコが手配した軍艦ロドニー（Rodney）に伊藤博文が乗り込んだときに、木戸孝允はヒコに大政奉還の謀略を打ち明けた。伊藤の真の目的は混乱しているに違いない京都の情勢を探るためであるという。戊辰戦争の開始を告げる鳥羽伏見の戦いが間近に迫っていた。このように大政奉還の秘話に係わったことは通訳という官職を辞していたヒコにとっては、印象深い出来事であったのだろう。また初代総理大臣になっていく伊藤博文との関係を強調したかったのかもしれない。自伝には木戸孝允と伊藤博文の写真が印刷されている<sup>xiii</sup>。

このときヒコは五代才助という男に出会う<sup>xiv</sup>。それは薩英戦争の後、薩摩藩がヨーロッパ視察に送り出した五代友厚だと思われる。彼は明治初期の政界の黒幕的な政商として有名になる薩摩藩きっての開明派だった。

ヒコと伊藤博文の関係は維新以降も続いていた。前述したように、ヒコは1868年8月に帰国後、初めて故郷に帰った。それは帰国から9年も経っていたが、幕末の攘夷の危険な雰囲気の中で外国人としても自由に移動ができなかった当時の事情から、無理からぬことであったのだろう。ヒコの帰郷に一肌脱いだのが当時兵庫県令（県知事にあたる）であった伊藤博文であった。伊藤はヒコ一行のために船を用意した<sup>xv</sup>。前に書いたように、ヒコが味わったのは深い幻滅であった。村を出たのが1850年、ヒコが13歳のときで、実に18年振りに見る故郷であったが、アメリカを体験した31歳の紳士には見るに耐えない日本の薄汚れた田舎の村でしかなかった。

## 第11章 明治維新後のヒコ

倒幕に成功した薩長中心の明治政府は国の急速な近代化を実現してゆく。この頃の日本には、ヒコと同じようにあるいはヒコ以上に、英語に堪能で西洋文明をよく理解するものも出現しつつあったが、その数は限られていたといえよう。

薩摩藩が1865年、英国に送り出した留学生の中に初代の文部大臣森有礼がいたが、彼は明治維新のときはまだ21歳でしかなかった。もっとも、その語学力と能力を買われて明治元年から官僚になって活躍した。1870年にはアメリカの小弁務使（今の外交官）に任命されている。

咸臨丸でアメリカ事情を見て廻った福沢諭吉は、維新のときは34歳になっていた。

ヒコは新政府内の人脈もあり、日本の近代化のためにいろいろな仕事を頼まれる。

例えば、1869年に香港の造幣局の設備を安価で日本政府に仲介し、大阪の造幣局創設に尽力した。もっともこの時は、勤めていた会社の仕事として行った。日本政府の窓口は五代友厚であった<sup>xvi</sup>。

肥後藩との関係は続いていて、藩主が国に帰るためにチャーターした外国船の航海中、万一の場合の通訳を頼まれたり<sup>xvii</sup>、アメリカ海軍法の翻訳を依頼されたりした<sup>xviii</sup>。

1870年8月、ヒコが勤めていたイギリスのグラバー商会が破産し、共同出資者としたかなりの損出を蒙る。異国での困難な生活や一時的な経済的危機を乗り越えてきた順風満帆のヒコが

遭遇する大きな躓きであった。このとき、ヒコは33歳であった。

その後しばらく長崎で肥後藩の高島炭鋳の経営顧問として、また独立した貿易仲買人として働いていた。

ヒコは、生まれた村のある姫路藩との交流もあり、1871年8月藩の重臣たちが長崎を訪れたときに外国人居留地にて西洋料理をご馳走などして、外国人の生活振りを見せて感謝され俸給を受けたりしていた<sup>xix</sup>。同年10月末、若き姫路藩主と面談し歓待され、藩主の紋が入った衣服を送られた<sup>xx</sup>。三度目の(多分、最後の)帰郷時に、親戚縁者にこの紋付の衣服を披露している。

1871年10月、旧徳川幕府の役人で外務省に勤めていた良友の齋藤氏から、外務省への就職の斡旋があった。官舎付きで俸給は250ドルであった。魅力のある提案であったらしくヒコの心も動いたが、備前藩主から頼まれた高島炭鋳の経営のために断らざるを得なかった<sup>xxi</sup>。

1872年5月、東京の大蔵省に出仕している友人(本野)より、井上聞多(馨)が大蔵卿に任命されヒコに手伝って欲しいと言っていると書面が届いた。ヒコは承知して8月に東京に向かった<sup>xxii</sup>。維新の前夜、ヒコは伊藤博文を通して長州藩士の井上と知り合っていた。井上はヒコを厚遇した。

*August 10<sup>th</sup>*. I took the morning train to Tokio and there by invitation took up my quarters with Mr. T. Waters till the furnished house put at my disposal by the Finance Department was got ready. I remained with Mr. Inouye until he resigned his post in 1873, and with the new Minister till the beginning of 1874, when at my request my engagement was cancelled. During all the time I served Mr. Inouye, I received nothing but the utmost kindness, and I look back upon that time with the most lively satisfaction. Mr. Inouye seemed never to have forgotten what little services I rendered him and his party at Nagasaki in 1868. (同上p.171)

大蔵省でのヒコの主な仕事はアメリカをモデルにして国立銀行を整備することであった。ここで渋沢栄一とも知り合っている。伊藤博文、木戸孝允、五代友厚、井上馨そして渋沢栄一との人脈はヒコの幕末からの日本での活躍を象徴するものであった。

大蔵省を退いた後のヒコは意外に地味な経歴を歩んでゆく。1872年に東京日日新聞・日新真事誌・郵便報知新聞の日刊紙が次々に創刊された。1879年には朝日新聞が創刊されている。ヒコが海外新聞を続けていたら、その人脈からしてマスコミ界で大きな成功を収めていただろうとつい想像したくなる。

1874年、大蔵省を退官したあと、1876年5月、北氏という人物とお茶の輸出の仕事始める。神戸に支店を出すことになりそれを任された<sup>xxiii</sup>。資金計画の杜撰さなどがたたり、本社との提携を解除した。もっとも、神経痛の発作で1881年に手を引くまで残務を引き継ぐ形で会社の経営に参加した。ヒコがこの時期の出来事として自伝の中で紙数を割いているのは、お茶の取引に関する裁判の話である。契約を守らない日本人の商人(HAYASHI KIHEI)との法廷でのやり取りを詳述するヒコは、法律上の自分の正当な権利を主張して契約概念など持ち合わせず法律をうまくかいくぐる狡賢い商人を非難している<sup>xxiv</sup>。ヒコの常識はやはりアメリカの商習慣のそれだった。

ヒコがお茶の商売に手を出したことを不思議なことに感じる。このとき、ヒコはまだ38歳で働き盛りである。当時の一流の英語使いとしてアメリカで西洋文明を吸収し幕末の日本で明治維新の立役者になる人たちと共に活躍し、太い人脈を築いたアメリカ市民、ジョセフ・ヒコにしてはあまりに地味な仕事のように思われる。おまけに取引上の詐欺事件に巻き込まれて長い

年月と精力を注いでいる。

1881年、ヒコは蒸気精米機を買って精米業を仲間と始める。事業としては余りうまくいかなかったようだ。精米機のリースで裁判沙汰になり、日本の奇妙な習慣を紹介するかのような解説が自伝で長々と述べられている<sup>xxv</sup>。1884年12月末、精米機付属の蒸気機関を兵庫県に貸して神戸の海岸通で電灯をともし実験に参加している。それが元で神戸の街に電灯が設置されたという<sup>xxvi</sup>。

お茶と精米の商売に手を出しているヒコはもはや日本の政治や経済の中枢に係わっていない。1884年から自伝は断片的になっていき、1891年10月28日の濃尾大地震のニュースで終わっているが、その間は23ページでしかない。その中で、鹿鳴館時代を象徴するようなダンスパーティの話などが、洋服の仕立て屋が大忙しで儲かっているといった観点から語られている。それに関連して興味深いのは、眉の剃毛とお歯黒の習慣をやめるように政府肝いりの海軍の医者が講演したという記述である<sup>xxvii</sup>。

1887年3月12日、神経痛治療のために東京への転地を医者に勧められたヒコは、横浜の駅で伊藤博文伯爵と邂逅する<sup>xxviii</sup>。東京にいる間、何度か伊藤を訪ねているが一度も会うことができなかった。日本政府の初代内閣総理大臣となって多難な時期に政治の運営をし、また帝国憲法の草案作りに多忙であった伊藤にとって、ヒコはもはや重要な人物ではなかったのであろう。また、ヒコが伊藤を始めとした明治政府の要人となっている人脈をたよりに政治経済的な利益を得ようとした形跡も自伝から伺われない。

ヒコは1997年12月12日、心臓病のために死去した。享年、60歳であった。

（以下、続稿）

- i JOSEPH HEKO, THE NARRATIVE OF A JAPANESE, edited by JAMES MURDOCH, M.A. VOL.1 and 2
- ii 近藤晴嘉『ジョセフ＝ヒコ』吉川弘文館、1986年 pp.112-114
- iii 山井徳行「ジョセフ・ヒコの異文化体験と帰国（第2報）」名古屋女子大学紀要第55号人文・社会編平成21年3月 p.206
- iv JOSEPH HEKO, THE NARRATIVE OF A JAPANESE, edited by JAMES MURDOCH, M.A. VOL.1 pp.220-229
- v 同上、pp.299-302
- vi 同上、pp.333-336
- vii 同上、pp.338-347
- viii 近藤晴嘉『ジョセフ＝ヒコ』吉川弘文館、1986年 pp.1-3
- ix JOSEPH HEKO, THE NARRATIVE OF A JAPANESE, edited by JAMES MURDOCH, M.A. VOL.2 pp.1-3
- x 同上、p.3, pp.13-15
- xi 同上、pp.83-48
- xii 同上、pp.118-129
- xiii 同上、p.95, p.99
- xiv 同上、p.98
- xv 同上、pp.130-133
- xvi 同上、pp.140-141
- xvii 同上、p.140
- xviii 同上、p.144
- xix 同上、p.151
- xx 同上、pp.152-153
- xxi 同上、pp.151-152
- xxii 同上、p.163

- xxiii 同上、p.196
- xxiv 同上、pp.205-215
- xxv 同上、pp.225-232
- xxvi 同上、pp.234
- xxvii 同上、pp.239-240
- xxviii 同上、pp.240-241